



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

柴田, 一成

CITATION:

柴田, 一成. はじめに. 京都大学大学院理学研究科附属天文台年次報告
2015, 2014年(平成26年): 1-2

ISSUE DATE:

2015-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/218154>

RIGHT:

1 はじめに

附属天文台の2014年度の最大のニュースは、何ととっても、岡山京大3.8m望遠鏡のドームの予算が正式に認められたことです。本年(2015年)1月にその内示がありました。これにより3.8m望遠鏡がようやく正式に完成する目処がついたことになります。ここまで至ったのも、当初の技術開発にかかる予算6億円を個人で支援してくださった宇宙会会員で私の同級生の藤原洋さん、望遠鏡開発計画のリーダーの宇宙物理学教室・長田哲也教授、プロジェクト・マネジャーの同・栗田光樹准教授をはじめとする開発チームのみなさん、それをサポートする理学研究科事務部のみなさん、応援してくださった歴代の研究科長、総長、そして関係する多くのみなさんのご支援のおかげです。みなさまに深く感謝したいと思います。

もう一つ2014年度に始まった大きな出来事は、「天文台基金」のたちあげです。きっかけは、2003年に補正予算でできた飛騨天文台のSMART望遠鏡(太陽磁場活動望遠鏡)が設置以来10年経ったため、維持費(年間1000万円程度)が突然打ち切られたことです。SMART望遠鏡は今も太陽全面の彩層H α 像観測では世界最高の性能を有しており、太陽研究や宇宙天気予報の基礎研究のために活躍中です。維持費がルールで打ち切られたからと言って、観測をやめるわけには行きません。それでなくても、予算(運営費交付金)も人も毎年減らされつつある状況があつて、ぎりぎりの予算でやっていましたから、突然、1000万円ほどの赤字が出てしまいました。こうなったら「基金」のしくみを作って、市民のみなさんにご支援(寄附)をお願いするしかない、というわけで、理学研究科事務部のみなさんが「天文台基金」のしくみ作りにご協力くださいました。「基金」のしくみ自体は2013年12月の教授会で正式決定しましたが、単に「基金」を作っただけでは寄附は集まりません。それで寄附してくださった方を優先的に花山天文台に招待する「天文台基金観望会」を創設し、5月にその記者発表をしました。そうしたら、多くのメディアが報道してくださり、それで寄附が集まり出しました。2014年1年間に500人余りの人々から総額約1200万円の寄附が集まり、赤字は解消できました。(8月～10月にはクラウド・ファンディングによる寄附もいただきました。)またこれらの寄附に際して、多くの方から、「(飛騨に)こんなに素晴らしい施設があるなんて知りませんでした」、「この歴史や現状をいろいろな手段で多くの人々に知らせるべきです」、「京大3.8m望遠鏡の挑戦を応援します!」、「市民に愛される花山天文台を応援します」など、多くの暖かい激励のメッセージをいただき、天文台職員一同、感激しました。ご寄附や応援メッセージをくださった多くのかたがたに深く感謝申し上げます。

附属天文台の研究に関しては、若者たちの活躍で太陽型星スーパーフレアの研究が大きく進展しています。論文が続々と出版されつつあることは昨年の年次報告で報告された通りですが、今年は一般向けの解説特集記事が、天文月報特集号として出ました(2014年5月号、7月号、9月号、全部で6本の解説記事)。一つの研究テーマでこれだけまとまった特集記事が出るのは珍しいと思います。スーパーフレア研究に関する招待講演の依頼も世界中からやってきています。(半分以上はお断りせざるを得ないのですが。)2014年は、英国天文学会の基調講演に招かれたり、チェコでは突然朝のニュースに出演を依頼されたり、反響の大きさに驚いています。

2014年末の時点で、附属天文台の人員は37人になります。内訳は常勤職員6人(教員4人、技術職員2人)、非常勤職員15人(うちPD研究員4人)、大学院生15人(博士7人、

修士8人)、宇宙ユニット教員2人です。このメンバーで、2014年は、査読雑誌論文23編(附属天文台構成員が第1著者の論文は9編)、国際会議集録論文8編、技報2編、研究会報告158編(うち海外国際会議発表28編(招待9編))の成果をあげました。また、2014年度には、附属天文台より、博士論文1人、修士論文2人が生まれ、学部教育でも課題研究3人、課題演習4人が天文台教員の元で研究・演習を終えました。

2014年には大変悲しいニュースもありました。9月12日に大学院博士課程3回生の大井瑛仁君が28歳の若さで急逝したのです。飛騨天文台での太陽黒点の観測や太陽観測用カメラの性能評価で頑張っているところでした。ご冥福をお祈りします。

アウトリーチ活動も活発に行なわれました。見学件数と見学者数は、飛騨天文台21件、560人、花山天文台70件、3160人、総計91件、3720人にのぼりました。一般向け講演や出前授業も87件もありました。

また、2013年に引き続き、世界的なミュージシャンの喜多郎さんが、花山天文台応援のための野外コンサートを10月4日に開催してくださいました。奥様の高橋恵子さん、ホーメイ歌手の山川冬樹さんとアイリッシュハープ奏者小川由美子さんも応援団に加わり、素晴らしいパフォーマンスや演奏を提供いただき、180人ほどの参加者が楽しみました。参加者の一人からは「とても素晴らしい内容で、演奏中には何度も涙が溢れるほど感動致しました。有意義なイベントに沢山の友人と共に参加出来たことを、心から感謝しております。」というようなメッセージをいただき、天文台職員一同感激を新たにしました。喜多郎さんをはじめとするミュージシャンの方々、参加者の方々、協賛をいただいた個人および団体の方々、さらに様々な面からご協力いただいた京都市教育委員会のみなさんに深く感謝申し上げます。

花山天文台に関してはさらに嬉しいニュースがありました。2013年に**京都市民が残したいと思う「京都を彩る建物や庭園」**に選定されたのですが、2014年はさらに重要度の高い**「認定」**という評価を受けました。また、2014年11月には京都市教育委員会より、花山天文台に対し、**「教育功労者表彰」**をいただきました。応援して下さった京都市民のみなさん、および京都市教育委員会の関係のみなさんには深くお礼申し上げます。

このように歴史的な施設・場所としての花山天文台の評価が高まりつつあるなか、「花山宇宙科学館構想」の計画協議が進みつつあります。これはもともとNPO花山星空ネットワーク発足の際に、大先輩の長谷川靖子さん(京都コンピュータ学院長)のご提案ではじまった計画ですが、岡山望遠鏡計画が優先だったので、長らく議論ができませんでした。しかし、岡山3.8m望遠鏡のドーム予算がようやく措置されたので、花山の将来計画の議論ができるようになりました。現在は京大内に「花山天文台将来構想検討ワーキンググループ」(委員長は前京大総合博物館長の大野照文教授)を設けて定期的に議論しています。NPOの計画案を引き継ぎ発展させ、花山天文台の古い施設・望遠鏡を保存するだけでなく、定期的に(できれば毎日でも)観望会や見学会の実施が可能なような財政的に自立したしくみを作ろう、という計画です。みなさま方のご賛同ご支援が得られれば、大変幸いです。

平成27年(2015年)12月31日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台台長 柴田一成